

第三百四十二回 青葉会

平成二十六年九月二十五日(木)

午後六時〜九時

丸紅来客食堂(談話室)

〈選者〉

☆ 川合万里子 先生(お怪我で欠席)

〈出席者〉

伊賀山そらお 今井紀久男 大林猛 小川恭延 川口孤舟 久米五郎太 後藤保明

豊田ゆたか 山崎亜也 山内天牛

〈投句〉

小西弘子・福島正明：(お二人は先生の付添いの為、欠席)

柿崎忠彦 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 古田昇 星田啓子 宮内規雄 渡邊盛雄

赤田堅 楠田彦十 小西弘子 在間千恵 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 福島正明

星田啓子 村田くに子 山崎青史 山本三恵

〈紙上選句〉

《選者吟》

詩生るるや友の帽子へ赤とんぼ

万里子 (紀・孤・天)

野良猫が頭掻き掻き日向ぼこ

全 (保・啓)

柚子六個百円也と縁台に

全 (ゆ・天)

秋うらら杖つく爺(ぢぢ)とよちよちへ

全 (隆)

ぢぢばばの応援晴るる運動会

全

《互選句》

八点

☆ 木登りの上手な少女空高し

規雄 (万・猛・孤・弘・隆・く・亜・天)

☆ 老いてなほ日々好日や大根蒔く

盛雄 (万・孤・弘・敏・ゆ・允・く・天)

(☆↓「老いぬれど日々好日の大根蒔き」)

七点

地球より海は溢れず望の月

孤舟 (紀・彦・五・正・亜・青・三)

☆ 目の前をすいとトンボの行く銀座

啓子 (万・恭・彦・保・龍・隆・允)

☆ 船頭の差す棹細し秋の川

弘子 (五・敏・啓・青・天・三)

☆ 無人駅繋ぎ刈田を汽車走る

恭延 (万・そ・彦・龍・允)

(☆↓「刈田中無人駅へと汽車走り」)

☆ 秋の旅錆びた駅舎のトタン屋根

全 (万・千・敏・允・正)

(☆上五下五を名詞で囲んでしまおうと詩のリズムが失われる↓「古駅のトタン屋根錆び旅の秋」)

☆ 玉子割るほかり湯気立つ新米に

ゆたか (万・堅・そ・弘・亜)

(☆三段切れにならない様に「新米の湯気ほつかりと玉子割る」)

☆ 揺れる萩下駄の音する神楽坂

正明 (万・恭・五・保・啓)

(☆例へば「萩揺るる神楽坂かな下駄の音」など…)

☆ 泣きやまぬ子の憎らしき残暑かな

そらお (万・猛・啓・く)

(☆下五を詠嘆で逃げないで言い切った方が迫力ある。↓「秋暑し」)

☆ 去(い)ぬ燕無事に戻れと独り言(こ)つ

保明 (万・紀・五・千)

(☆例へば「帰燕へと無事に帰れと独り言ち」など…)

☆ 寄席はねて嘶家肴に新走

ゆたか (万・紀・敏・正)

反故にせし約束もあり十三夜

亜也 (孤・弘・龍・啓)

☆ 郊外に一人バス待ち猫じやらし

天牛 (万・彦・保・允)

(☆↓「穂芒や独りバス待つ町外れ」)

☆ 嫁たちが連れ立ちてくる敬老日

全 (ゆ・正・啓・三)

標本を箱に並べて夏果てる

全 (万・孤・弘・青)

☆ 木犀の香りを辿る遊歩道

そらお (堅・ゆ・隆)

☆ 山車の行く商店街のせまさかな

全 (万・彦・保)

(☆↓「狭さ」漢字の方が良い)(岸和田のだんじり)

ヒガンバナ咲きほこれども葉を知らず

猛 (そ・千・ゆ)

蒼穹へ武装蜂起の曼珠沙華

孤舟 (猛・保・正)

☆ 墓洗ふことに苗字は懇ろに

恵洲 (万・孤・天)

☆ 妻の留守守る糠床秋なすび

堂哉 (万・敏・く)

三点

(☆)「秋茄子を妻の留守守る糠床へ」
☆せせらぎの足湯に憩ふ伊豆の秋

ゆたか (万・そ・青)

二点

☆秋霖や鐘撞堂(かねつきどう)に樋(とじ)の無く
☆秋の蚊の声なく飛んで叩かれり
☆秋の日や捨て犬独り檻の中

正明 (万・亜・青)
そらお (万・ゆ)
全 (万・隆)

「牧神説夢」無心会書展

☆天高く今文(きんぶん・漢の隸書)躍るドビツシー

紀久男 (万・恭)

☆初陣に敗れ深手の月夜なり(「太功記」十段目)

全 (万・く)

☆さまざまの集ひの誘ひ秋近し

猛 (万・恭)

☆野分吹く大東京のビル谷間

恭延 (万・龍)

満月やスーパームーンに手を伸ばし

五郎太 (弘・千)

禰宜も閑だから祭人まばら(芝神明)

保明 (猛・亜)

雨上がり集(すだく虫の音透き徹(ととお)り

全 (猛・三)

かなかなは鳴き納めしか今日鳴かず

惠洲 (そ・恭)

秋風や韓国料理のレシピ集

正明 (龍・青)

☆忘られし鎮守の絵馬の秋出水

昇 (万・彦)

☆うとうとと名残の蟬の鳴くを聴く

啓子 (万・堅)

☆鏡花忌や撫でる装丁雲母摺(きらすり)で

全 (堅・そ)

残る蟬宮の御籤は中吉で

亜也 (万・紀)

☆もろこしの焦げも賞でつつ醬油塗る

全 (堅・正)

障子貼り次は畳と妻笑ふ

全 (万・千)

紀久男 (猛)

糸に乗る嫉妬の焰(ほむら)冷じく(新内「日高川」)

全 (亜)

☆従兄弟訪ふ先づは酔芋茎(すずいき)純米酒

全 (万)

☆名月や惨事続きに顔隠し

猛 (隆)

☆沿線に赤き挨拶曼珠沙華

恭延 (万)

降り立てば鄙びた駅に秋日和

全 (龍)

哀れ蚊やしぶとく公園閉鎖させ

全 (紀)

☆戦争を知らぬ世代も敬老の日

忠彦 (紀)

☆湖はやさしき埒鴨来る

全 (く)

☆勝馬を降りゼッケンへ秋夕日

孤舟 (万)

☆秋の暮円相書ける日はいつか

全 (万)

☆香合の銀の色映ゆ望の月

五郎太 (恭)

☆彼岸花車窓をかすめ紅の帯

全 (三)

☆白帝のゆるりと掛くる岩畳

保明 (千)

☆秋彼岸がん移転すと受信せり

弘子 (五)

☆背伸びて声変る孫の運動会

健介 (紀)

☆秋立つやすまし顔なるペアルック

全 (万)

☆山菜の秋の香高き夕餉かな

堂哉 (万)

☆竹林に秋の声きく修善寺

ゆたか (堅)

☆軍隊の迷彩服や杜鵑草(ほととぎす)

全 (允)

☆太極拳の老師の背中曼珠沙華

正明 (三)

☆北に来てトンボの群れや天高し

全 (五)

☆曼珠沙華埋(うづ)み火ちろり舌を出す

啓子 (敏)

☆夏風邪の孫と「となりのトトロ」観る

全 (紀)

☆ねむられぬ夜の仲間に蟲すだく

盛雄 (万)

●次回青葉会

十月二十三日(木) 午後六時〜九時 (丸紅 談話室)

▲当季雑詠五句 投句二句

十一月二十七日(木)

一 句会始まる直前に、万里子先生が本社ビル玄関の閉じかかったオートドアに打つかつて転倒。救急車で東大病院へ。正明さん弘子さんが付き添っていかれ、句会終った頃戻つて来られ、大腿骨骨折で手術されること報告あり。夕方から降りました雨で滑ったことが原因かと想像されます。

一 気丈な先生から投句とおつまみ(チーズ)、菓子(餡入り甘辛団子)を頂戴しました。弘子さん寄贈の日光甚五郎煎餅、亜也さんからの『手取川ひやおろし』純米吟醸(石川)、小生の「米鶴まほるば」純米(山形)を賞味しつつ30分遅れで開始。

二 孤舟さん持参の「俳句四季」10月号：『今月の華』のタイトルで孤舟さんの写真とエッセイ(二頁)。「俳句界」10月号：『結社の多様化』特集で編集長から代表となつた「爽樹」の合議運営制について執筆(二頁)を回覧し乍ら猛さんのスピーディな司会で淡々と進行。あつさり閉会となりました。御覧のように盛雄さん、規雄さん、孤舟さん、啓子さんの句が高得点。恭延さん、天牛さん、ゆたかさんらが好成績でした。

当初、一周忌の清さん、和夫さんを偲んで献杯。そして結社代表に就任された孤舟さんの祝い酒の予定でしたが、さつぱり氣勢上がらず仕舞となりました次第。

二 関係者近況

- 泉へと師の健脚を偲びつつ 万里子 病棟の七夕竹に手を合わす 規雄
- 師の句碑へ夕蝸の入み音かな 全 全 「NHK俳句」10月号 小澤實選
- 花火果て天心閑か暈の月 全 全 白日傘回しつづく美人らし 全
- 翻る木の葉の明暗秋暑し 全 全 「NHK文芸選評」10月号 西村和子選
- 枝豆や甍子捨つれば人寄りて 眞希子 囁き合ひ梅雨を楽しむ羅漢どち 孤舟
- 蟬は殻出でて鳴くのみ飛ばんのみ 全 全 「俳句四季」10月号
- 胸騒ぐ封書の厚さ梅雨の雷 全 全 飢えし日は遠のくばかり今年米 盛雄
- 課題図書机上にどつしり夏休み 全 全 筆談は紙ナブキンへ長き夜 全
- 爺ちやんとさぶさぶ清水の小流れに 弘子 すれ違ふ佳人秋気を伴へり 健介
- 夏草を跳ぬるスピッツ細き足 全 全 秋霖や滑る古道の大石段 全
- 息深く吐きて椅子鳴る梅雨深し 全 全 気つ風よき祭の頭(かしら) 女形なり 紀久男
- 鴨川も川床(ゆか)に灯点し京暮るる 恭延 秋の夜に漱石読まんと茶碗酒 全
- 嵐山火照り静むる冷し蕎麦 全 全 「ささらぎ句会」9月
- 「夏祭浪花鑑」 古寺へうす暗き道曼珠沙華 允章
- だんじりの煽る狂気や義父殺し 紀久男 子規の墓ひつそりとあり秋日和 全
- 鉄斎の青緑山水見て涼し 全 全 桐一葉音なく波紋ひろごりぬ 全
- 「萬緑」 十月号 爆裂の如き秋雷車軸雨 堂哉
- 渚なるサンセットパー花芙蓉(バリ島) 全

三 先生が入院された翌日、眞希子さん(下関在住の御長女。「萬緑」同人に10月1日に推挙されました)、数日後に友実氏(近所にお住いの御長男)より謝礼と手術予定の電話あり、先生からも手術前日にお電話頂戴しました

先生からは小生依頼の選句(御覧のように選句の大盤振舞と懇切な添削)を郵送することと、前々から云つておられた指導者交代：この際、辞退する旨の内容でした。

先生には速やかな御回復と永年御指導頂いたことへの感謝、そして指導者御辞退を概ね了解：外部から招聘せず、正明さん恵洲さん小生の創立メンバーと孤舟さんらの合議制でいきたいと申し上げます。俳壇に頭角を現わしつつある孤舟さんに後任を頼もうと思つたんですが、結社の代表に就任されたばかりでNHK文化センター川越の講師(四年前に急逝した師の小澤克己主宰の後任)もされるなど多忙を極めておられる現状を斟酌したものです。主だった皆様の合意となりつつあります。